

## 原 著

# 20世紀転換期アメリカ合衆国公立学校における 学業・行動・健康問題に対する心理学者の関与 —L. ウィトマーによる最初期の心理クリニックを中心に—

吉井 涼

本論文では、20世紀転換期のアメリカ合衆国公立学校において、学業・行動・健康に逸脱を示す子どもに対して、心理クリニックを開設し臨床的対応を行ったL. ウィトマー（Lightner Witmer 1867-1956）に焦点を当て、心理クリニック開設の背景、およびその初期の実態、成果と限界を検討した。彼は、心理学を教育の分野へ応用することを意図し、公立学校教員の相談を直接の出発点として心理クリニックを開設する。彼は心理クリニックにおいて、診断だけでなく指導を導入し個別性を重視した対応を実施する。個別性が重視された背景には、子どものもつ欠陥の要因の特定と適切な教育制度の開発が可能になるという彼の信念があった。初期の心理クリニックでは、個々の子どもの状態を多様な検査で診断し、学校、医師、家庭と連携しながら試行的な対応が実施された。初期の心理クリニックでの実践は、統計的・数量的評価に依存する革新主義の時代にあって、高い評価を得たものではなかった。

キー・ワード：L. ウィトマー 心理クリニック 学業・行動・健康の逸脱 アメリカ合衆国

## I. はじめに

20世紀転換期のアメリカ合衆国（以下、アメリカ）では、就学義務の強化、児童労働の制限、怠学取締官の配置による就学の督励に加え、膨大な数の新移民の流入と都市人口の急激な増加などにより、学業・行動・健康に逸脱を示す子どもの問題が公立学校関係者の間で初めて認識されるようになる（Hoffman, 1975; Lazerson [1983] 18; 宮本, 2005; 下村, 1975）。

アメリカにおいて心理学者が公立学校へ関与し始めるのは、このような学校問題が顕在化した時期であった。クラーク大学（Clark University）初代総長G. S. ホール（G. Stanley Hall

1844-1924）に端を発する児童研究運動（child study movement）の隆盛に伴い、教育における個人差が重視され始め（Doll [1967] 179; Hollingworth [1933] 369; 松岡 [1982] 360）、心理学者は個々の子どもの調査と標準から逸脱した子どもへの対応を試みた。

臨床心理学（Clinical Psychology）の祖として知られるL. ウィトマー（Lightner Witmer 1867-1956）は、1896年に自身の勤務するペンシルベニア大学（University of Pennsylvania）に国内初となる心理クリニック（Psychological Clinic）を開設した人物である<sup>1)</sup>。彼は、通常学校で要求される学業・行動の水準についていられない子どもや、健康状態に問題を抱える子どものもつ個別的ニーズに着目し、公立学校教員等の学校関係者、医師、子どもの家族等から

筑波大学大学院人間総合科学研究科  
日本学術振興会特別研究員

の相談を受け、こうした子どもたちへの臨床的対応を試みた。さらに彼は、心理クリニックでの成果を前提として、公立学校制度の在り方についても関心を拡大していった（中村・岡[2009] 121）。

アメリカの心理クリニックは、1910年頃から急速に拡大し（Smith, 1914）、1930年頃には学校教育や児童福祉の分野において主要な位置を占めるようになる（Hollingsworth, 1933）。そのなかには、ウィトマーの心理クリニックをモデルとして開設されたクリニックも複数存在した<sup>2)</sup>。それゆえ、ウィトマーの心理クリニックについて、その開設経緯と実践を明らかにすることは、アメリカ国内における心理クリニックの実態や教育に果たした役割を解明するうえで前提となる、きわめて重要な研究課題である。

しかし、ウィトマーの業績は長い間研究上の関心とはならなかった（Gardner [1968] 719; McReynolds [1987] 849）<sup>3)</sup>。ウィトマーに関する本格的な研究はO' Donnell (1979) に始まり、その後心理クリニック開設から100年目にあたる1996年にはAmerican Psychologist誌第51巻がウィトマー特集を組み、また翌97年にはウィトマーに関する伝記が出版された（McReynolds, 1997）。近年、ウィトマーには心理学の立場から少しずつ光が当てられるようになってきており（Jones, 2002; McReynolds, 1997; O' Donnell, 1979; Richards, 1988など）、彼の思想や実践に研究上の関心が向けられている。しかし、彼の主たる事業のひとつであった心理クリニックについては、いくつかの研究にごく部分的な言及がみられるだけで、詳細な分析は未だ行われていない。さらに、ウィトマーの心理クリニックは公立学校と深い関わりを持っていたことが指摘されているものの（Baker, 1988; Fagan, 1992; Levine & Levine, 1970; Sarason, 2001）、その関係の詳細についても不明である。

そこで本研究では、20世紀転換期を対象時期とし、ウィトマーが何ゆえに通常学校に在籍する学業・行動・健康に逸脱を示す子どもに関心をもったのか、いかなる理由から彼らの対応の

場として心理クリニックを開設したのか、また彼らに対する初期の対応はどのようなものであったのかを解明することを目的とする。

主な資料として、ウィトマーの著書・論文および心理クリニック関係資料に加え、当時の公立学校の実態を把握するためにフィラデルフィア教育委員会年次報告書を用いて分析を行う。

なお、本研究は歴史研究であり、用語は当時の表現を用いる。

## Ⅱ. L. ウィトマーによる心理クリニックの開設と臨床的方法の開始

### 1. ウィトマーの経歴と心理クリニック開設の経緯

(1) ウィトマーの経歴：L. ウィトマー（Lightner Witmer 1867-1956）は、ペンシルベニア州フィラデルフィア市で出生した。父親は薬剤師であり、ウィトマーの弟は父親と同じ薬学を、妹は医学を専攻しているが、こうした医療分野との日常的な関わりは、ウィトマーの心理学に対する思想や心理クリニックでの実践に重要な影響を及ぼしたと考えられる（ウィトマーの詳しい経歴についてはMcReynolds, 1997参照）。

ウィトマーは、ペンシルベニア大学卒業後、1888年の秋から、フィラデルフィア市内の私立中等学校ラグビー・アカデミー（Ragby Academy）で教員として勤務するが、ここで彼は、作文に困難を示すひとりの生徒と出会うこととなる。ウィトマーによれば、その生徒の作文には、正確な文章がほとんど存在しなかった<sup>4)</sup>。ウィトマーは生徒が、時計の針の音のような僅かな音を聞き取ることはできるにも関わらず、“grasp”と“grasped”のような音に対する弁別は困難であることを発見する。ウィトマーは彼の状態を言語性聾（verbal deafness）と呼び、3歳から4歳用の初歩的な発音訓練から開始して、単語を聴く訓練、さらに文字や単語レベルの指導を行った結果、彼の作文能力は顕著に改善し、ペンシルベニア大学へ入学できるまでに改善したという（Witmer [1907a] 3）。

しかしその後、大学生になっていた生徒と再会したウィトマーは、結局、彼の欠陥が克服されないままであったことを悟る。この事実は、ウィトマーにとって大きな衝撃であった。彼はその生徒が自身の欠陥ゆえにどれだけ多くのものを喪失したかを痛感したが、とりわけウィトマーが問題視したのは、医師であるこの生徒の父親の責任であった。なぜなら、生徒の言語学習上の困難の主因は2歳のときの頭部の損傷にあったからである。もし、父親が早い時期に適切な対応を試みていれば、彼の欠陥は克服されていたはずであり、医師こそは、脳の損傷には学業の遅れ (retardation) を引き起こす可能性があること、それゆえ特別な指導が必要であることをもっとも強く認識すべき立場にあるというのがウィトマーの考えだったのである (Witmer [1907a] 3)。

(2) 心理クリニック開設の経緯：ラグビー・アカデミーでの経験によってウィトマーは、早期発見と早期訓練の重要性に加え、それらを実現するうえで心理学が果たすべき役割を痛感する。1889年秋、ペンシルベニア大学大学院に入学した彼は、翌年6月にラグビー・アカデミーを退職し、実験心理学の権威であった同大学教授J. M. キャッテル (James McKeen Cattell 1860-1944) の助手となる (McReynolds [1997] 34)<sup>5)</sup>。その後、ライプチヒ大学 (Universität Leipzig) に留学し、国際社会における実験心理学の第一人者であったW. ヴント (Willhelm Wundt 1832-1920) のもとで博士の学位を取得した彼は、1892年にキャッテルの後継者としてペンシルベニア大学の教員に着任した (McReynolds [1997] 36-37, 51-52)。

このように、キャッテルやヴントの影響を通じて、実験心理学を自らの学問的基礎とし、人間の個人差へと関心を深めていたウィトマーであったが、彼は1894年にペンシルベニア大学心理学部の新たな講座として、児童心理学研究セミナーを開講している (Catalogue of the University of Pennsylvania: CUP, 1894-1895)。さらに、1896年2月には、フィラデルフィア市の教育ク

ラブ (Educational Club) で開催した「教員に対する心理学指導」と題する講演を通じて (Witmer [1896a] 153)、徐々に子どもの問題への関心を具体化するとともに、公立学校関係者や教員との関係を構築していく。

教育クラブでウィトマーは、学校教員に価値ある心理学として、遺伝と関連した知的特徴、身体的状態と知的発達の関連、社会的環境、生理学的心理学などについて講演しており (Witmer [1896a] 159-161)、心理学を行政や教員、親へ応用することを求め、遺伝や環境、身体的・知的発達の理解の重要性を説いたホールと共通性が見られる (Fagan [1992] 238)。ウィトマー自身もホールが創刊した心理学雑誌 (Journal of Psychology) と教育学研究誌 (Pedagogical Seminary) に影響を受けたと回顧している (Witmer [1896a] 160)。

ウィトマーにとって、心理クリニックの開設に結びつく直接的な契機となったのは、ペンシルベニア大学が1893-94年度より開設した公立学校教員を対象とする公開講座であった。1894-95年度以来、心理学講座の講師を担当することとなったウィトマーは、1896年3月、受講生のひとりであった公立学校教員M. T. マクガイア (Margaret T. Maguire) から綴字に誤りを示す14歳の男子生徒の指導について相談を受ける。マクガイアによるこの相談が、ウィトマーの人生を大きく転換させる画期となったことは、後年、この生徒への指導の開始を以って心理クリニックの開設と位置づけていることから明らかである。心理学者が心理学の有用性を社会に示すことを目指していた時代において (Brown [1992] 36)、学業に遅れのある子どもに対する指導経験をもつウィトマーが、公立学校教員からの相談を受け入れたことは自然な結果であったといえる。

(3) 心理クリニック最初の事例にみる公立学校教員との連携：担任教員からの相談を受けたウィトマーは、男子生徒が在籍する公立学校および彼の担任教員であるマクガイアと連携し、およそ1年間にわたって継続的な指導を実

施した。一連の指導は、多岐にわたる検査を通じての子どもたちの状態の把握に始まり、医師との協力、指導終了後のフォローアップの実施など、後年の方法論に連なる内容を含んでいた。

相談時、男子生徒には正規の学年から3年の遅れ<sup>6)</sup>がみられた。ウィトマーは彼に対し、担任教員の主訴であった綴字に加え、読み、書き、記憶の検査を実施したほか、学校での成績や様子に関して教員からの聞き取りなどを実施した(Witmer [1907c] 55)。担任教員の報告から、ウィトマーは、彼の綴字と読みの欠陥(deficiency)は学校での不十分な指導に原因があるとの推測に至った(Witmer [1907c] 56)。そこで、当初はウィトマーの助言に基づき、在籍する公立学校内での指導が試みられた。しかし、担任教員の時間的制約のため、同年の秋以降は毎週1回、男子生徒が心理クリニックを定期的に訪問し、ウィトマー自身によって綴字と読みの指導を行うという方法に変更された(Witmer [1907c] 56)。心理クリニックでの指導に加え、担任教員による日常的な学校での教育により、およそ1年後には男子生徒には綴字と読み能力に顕著な改善がみられたという(Witmer [1907c] 56-60)。さらに、指導の過程においてウィトマーは、男子生徒に複視の問題があることを発見し、医師によって眼鏡が処方された。もっとも、この問題は結局、眼鏡の処方では解決しなかった。男子生徒への指導は約1年で終了したが、半年ほど経ってウィトマーのもとを訪れた男子生徒は、眼鏡をかけても眼がよくなると不満を訴えた。検査の結果、深刻な問題が発見された男子生徒の視覚は、手術によって多少改善し、男子生徒はその後落第することなく、グラマースクールを卒業したという(Witmer [1907c] 60-61)。

男子生徒に対する指導経験を通じてウィトマーは、かつての彼にとっての学問的基礎であった実験心理学から大きく転換していく認識を得ることとなる。すなわち、精神薄弱や盲のような明白な障害は認められないにもかかわらず、学習に遅れや困難を示す子どもに対して、その

原因を特定し、問題の解決に結びつく手段として、ひとりひとりの子どもに対する個別的な研究と特別な指導を構想したのである(Witmer [1907c] 62)<sup>7)</sup>。さらに同年には前述の男子生徒に加え、綴字の誤りや全般的な遅滞などの問題をもつ数名の子どもも心理クリニックで相談を受け、毎週一定時間の指導を行っていた(Witmer [1907a] 4)。

## 2. 心理クリニックの実態と初期の運営方針

(1) 心理クリニックの目的と想定された対象：開設初期の心理クリニックの目的は、個々の事例の注意深い研究をすること、および徹底した検査に基づいて、各個人が必要とする指導を提案することであった(Witmer [1896c] 464)。心理クリニックの対象は、「些細な身体的・精神的・道徳的欠陥(deficiencies)があるが、特別な施設での介入を必要としない、もしくは親たちがそれを拒む子どもたち」であった(Witmer [1896c] 464)。具体的には、聴力、視力、言語に困難がある子ども、学業不振児、記憶や注意が欠陥的である子ども、そして単なる神経質さ、落ち着きの欠如、未成熟な性質が不道徳な状態になることを防ぐために個別的注意を必要とする規律に問題のある子どもが想定されていた。加えて、「生まれつき悪い綴字の子ども、1つの科目のみ学業不振な子ども、早熟、知的能力の発達を阻害するほどの自意識が強い、もしくは内向的な子ども」(Witmer [1896c] 464)が挙げられており、盲や聾、精神薄弱のように明確な障害がみられる子どもは、心理クリニックの対象ではなかった。

それでは実際に心理クリニックにはどのくらいの子どもの来談していたのだろうか。心理クリニックの来談児数から、ウィトマーが開設初期において何を意図して心理クリニックを運営していたのかが分かる。Table 1は、心理クリニックが開設された1896年から1907年までの12年間に、来談した子どもの数を年度別に示したものである。1906年までの来談児数が、1907年と比較して少ないことが分かる<sup>8)</sup>。

(2) ウィトマーにおける理論的基盤の欠如

Table 1 1896年から1907年までの来談児数

年	1896	1897	1898	1899	1900	1901	1902	1903	1904	1905	1906	1907
事例数	24	14	7	7	0	3	4	11	11	8	4	75

出典) McReynolds [1997] 117

による初期心理クリニックの来談児の制限：心理クリニック開設初期において来談児が少ない理由には、多くの事例を満足に扱うための手段がないと考えるウィトマーが、まずは少数の事例を通じた数年の経験と集中的な研究が必要と考えていたことがあった (Witmer [1907a] 5-6)。彼は、自身を導く理論的基盤の欠如によって、実践しながら自らの方法論を試していくしかなかったと述べている (Witmer [1907a] 4)<sup>9)</sup>。初期の心理クリニックにおいて、精神薄弱児がその対象に含まれていないことは既述のとおりであるが、実際には来談しており、彼らに対し診断と指導が試みられていた<sup>10)</sup>。その理由には、こうした自身の方法論に関わる現実的な制約があったと考えられる。というのも、1896年にウィトマーは、欠陥児 (defective) についても、正常児よりも良い調査対象となりうるとして、その研究対象としての可能性を示唆している (Witmer [1896c] 463)。欠陥児の知的状態と身体的状態に関する知識を得ることで、正常と異常の狭間に位置する子どもの理解や指導方法の開発に繋がると、ウィトマーは考えており (Witmer [1896b] 394; [1896c] 463)、彼は実際に相談心理学者としてペンシルベニア州エルウィン精神薄弱者施設 (Pennsylvania Training School for Feeble-Minded Children) に関わった (McReynolds [1997] 123)。学生の訓練においても、ペンシルベニア州内の精神薄弱者施設や盲学校、聾学校への訪問と調査・研究が重要であると彼は指摘した (Witmer [1896c] 463)。

さらに、初期において来談児が少数に限定されていた背景として、学生の育成に重点を置いたことが挙げられる。学生を獲得し科学的方法を訓練することで、心理クリニックの発展と心理学の科学としての確立を目指していた (Witmer [1907a] 6; [1915b] 549-550)。

ウィトマーは、心理クリニックの開設から11年を経た1907年に「過去10年間のペンシルベニア大学における心理学実験室の活動の大部分は、児童心理学、特に臨床的方法に関する学生の訓練に捧げられた」(Witmer [1907a] 7) と振り返っている。彼は、心理クリニックの開設以降、实际的な活動や独自の調査の方法を学生に習得させる教育課程としてペンシルベニア大学内に心理学課程を整備していく。そこでは、心理学を専攻する大学生、大学院生に加え、教員、医師、さらにはソーシャルワーカーまで幅広い受講者をその対象として想定された (Witmer [1907b] 27)。

人材育成を重視した背景には、適切な訓練が実施されていないことに対するウィトマーの危惧があった (Witmer [1907a] 7)。「学校の教室、少年裁判所、道路」を「心理学実験室」とみなし、科学的研究を可能にする多くのデータが存在すると考えていた彼は、適切な訓練の欠如によって、科学的研究のための価値あるデータの放棄に繋がると指摘した (Witmer [1907a] 7)。詳細は後述するが、科学としての心理学の確立は、ウィトマーに限らず当時の心理学者の関心の中心であった。

すなわち、ウィトマーの心理クリニックは、開設時から既に明確な方法論を持っていたわけではなく、実際の子どもの関わりの中から、一人一人の子どもの状態を把握するための診断方法、個々の子どもに合った指導方法、そして診断や指導に携わる後継者の育成方法を確立していった。

### 3. 心理クリニックの来談児の実態と指導の導入

(1) ケースレコードからみる心理クリニックの診断内容・方法：それでは、心理クリニックには実際にどのような子どもが来談し、いか

なる診断・指導を実施していたのかをケースレコード (Case Record) から見ていく。ケースレコードは、オハイオ州のアクロン大学心理学史資料室 (Archives for the History of American Psychology, Akron University, 1965年設立) にマイクロフィルム形式で保存されており、心理クリニックが開設された1896年から継続的に、来談児の性別、年齢、依頼者、状態、診断過程と担当医、指導過程などが記録されている (Levine & Wishner [1977] 60)。手書きとタイプによって記録され、保存状態が悪く判読不可能なものも散見された。1896年から1906年までのウィトマーによる著書は少なく、この時期の彼の理念および心理クリニックの実態を把握するために不可欠な資料である。この時期、ケースレコードは全部で93件見られたが (McReynolds [1997] 117)、1ページのものもあれば数十ページに渡るものまで様々であった。

心理クリニックでの診断期間と介入頻度は、不明なものが多く、最初の検査結果のみの記載で終わっているケースや、約1年半に及ぶ介入の記録が記載されたケース (Case Record, 0056) も見られた。たとえば、1902年に学業不振 (backward) や怠惰 (truancy) の子どもを対象として開設された特殊学校から連れてこられた10歳か11歳の男子生徒は、1903年1月に最初の検査が実施され、観察者は不明であるが、同年6月半ばまで学校での様子がほぼ毎日観察され

ていた (Case Record, 0063)。

それでは、初期の心理クリニックで実際に試みられた診断内容・方法は具体的にどのようなものだったのであろうか。心理学者による基本的な検査方法が確立されていない時代において (McReynolds [1997] 83)、この時期の診断には、多種多様な検査が用いられていた。具体的にあげると、家族や教員からの聞き取りによる子どもの生育歴や学校での様子・成績の調査、視覚や聴覚などの身体的状態の検査、そして読み・書き・計算・色の検査などである。心理クリニック内での検査に加えて、来談児が在籍する学校での行動観察が行われた事例もいくつか見られた (Case Records, 0063; 0073)。1897年に来談したケース番号0037の来談児に対し、ウィトマーが使用した6枚の検査用紙の内容をTable 2に示す<sup>10)</sup>。

(2) 心理クリニックにおける指導の導入とその実態：1896年から1906年の間のケースレコードの93件中、判読可能な54件の記録から、この時期の来談児は、3 R'sなどの学業上の問題、記憶力の問題、怠惰・神経質・不活発・盗癖・喧嘩好きなどの道德上の問題、視覚や聴覚およびアデノイドや扁桃腺肥大といった身体上の問題、そして言語の問題など、きわめて多岐に及ぶ問題を示していたことがわかる。

こうした来談児に対し、心理クリニックでは、家庭指導、医師や教員との連携、生活環境の改善、実際の経験の重視、職業指導などが、個々

Table 2 心理クリニックにおける検査内容

項 目	内 容
基礎的情報	名前, 住所, 来談日・時間, 誕生日, 教育歴, 病歴, 生育歴, 爪や歯などの外見的特徴, 両親の職業・出生地・誕生日・死因など
身体的状態	健康状態, 身長, 体重, 表情, 皮膚の色, 顔色, 髪質, 眼・耳・鼻・口・喉の様子, 姿勢, 非対称性などの特徴の有無など
行動の様子	歩き方, 利き手, 異常な動作の有無, 呼吸, 言語・読み・書きの状態, 指示に対する応答性など
知的発達の程度	性格, 気質, 道德, 観察力, 記憶力, 幻覚などの有無, 異性に対する態度, 同年齢の子どもとの比較など

出典) Case Records [1897] 0037

の状態に合わせて試行的に実施されていた。依頼者が明らかなものは判読可能な54件中29件であり、そのなかで学校関係者が19件と半数以上を占めていた。その他に医療・保育関係者が7件、親が2件、セツルメントハウスが1件見られた。学校関係者のなかでも、特殊学校関係者は1899年の特殊学校開設に伴い、7件見られた。

心理学者の主たる役割が心理・教育検査に限定されていた時代において (Fagan & Wise [1994] 32)、診断のみにとどまらず実際の指導を実施した点にワイトマーの独自性があるといえる。しかし、来談児の状態は学業不振や非行などの共通項は持っていたが、その要因や詳細な症状については様々であり、特定の状態像への明確なアプローチは未解明であった。初期の心理クリニックでは、来談児の多くが視聴覚の欠陥、アデノイド、扁桃腺肥大などの身体的欠陥を持っていたため (Case Record, 0021; 0040; 0043; 0070; 0072; 0073など)、対応は、ワイトマーによる医師への委託が多いが (Jones [2002] 54)、具体的な指導内容・方法について、ケースレコードを用いて見ていく。

ケース番号0074は、16歳でクレチン病の重度の痴愚の女子であり、ワイトマーによる家庭への介入・指導の重視を示す好事例である。彼女は、10年間学校に出席するも、第3学年で学校を辞めており、第1学年の全ての学業を達成することさえできなかった。彼女は無頓着で怠惰であり、母親は毎日彼女の髪をとかし、服を着せていた。彼女は家事に関心を示さず、多くの時間を家の外で過ごしていた。彼女には自分自身を世話し、家事をする能力があると考えたワイトマーは、母親に対し、毎日一定量の家事をやらせること、自分で着替えない限り外出させないこと、自分で食事を用意しない限り食事させないことを指示した (Case Record [1904] 0074)。また、吃音のある男子の母親に対しては、心理クリニックで実施した指導と同様の内容を、1日に数回、家でも行うよう指示した (Case Record [1903] 0064)。

ワイトマーは家庭だけでなく、子どもを取り巻く環境の改善を重視していた。1905年3月に来談した言語欠陥と偏食傾向がある9歳の男児の場合、診断の結果、彼の欠陥の原因がアデノイドと栄養失調にあるとワイトマーは考えた。そこで彼は、医師への委託に加え、医師に対して、適切な薬、食事、入浴、運動を実施させるよう指示しており (Case Record [1905] 0087)、医学的治療のみならず、日常生活にも重点を置いていた。

また、理論的基盤の確立していなかったワイトマーの指導方法は、精神薄弱教育の先駆者であるE. O. セガン (Edouard Onezime Seguin) を参考にしていたと考えられる。言語欠陥のある男子に対する指導で彼は、毎週3回、時には1時間以上、公園を歩き、歌い、遊んで過ごし、また手工活動を重視した。その背景には、「感覚は、物との実際の接触から来る」というワイトマーの考えがあり、言語の問題に関しても「最初に経験」が必要と考えており (Case Record [nd] 0041)、彼の教育実践にはセガンの生理学的教育と類似性が見られる (ライスマン [1982] 44; トレント [1997] 88-91)。

ワイトマーの指導は、将来の職業についても考えられていたことがケース番号0039の男子からわかる。彼は19歳で、責任感がなく、知的能力に制限が見られた。ワイトマーは、その男子のライフワークを探すことを目的に、彼に対し、ペンシルベニア大学の植物部門での仕事を与えた (Case Record [1897] 0039)。職業指導についてワイトマーは、ラグビー・アカデミーでの経験や心理クリニックでのケースにおいて関心を深めており、それは後に職業指導に特化したクリニックの開設に至るほどであった (McReynolds [1997] 205)。

以上のように、試行的にはあるが、ワイトマーは心理クリニック開設初期においても、診断だけでなく個々のニーズに対応した指導を実施していた。この時期の指導方法は、心理クリニックの来談児が増加し始める1907年以後においても同様に実施されており (Fagan [1992]

243)、少数の事例に対する長期的で個別的な指導を通じて、後年の実践の基盤を確立させていったといえるだろう。

### Ⅲ. ウィトマーにおける公立学校問題への関心と実験心理学から臨床心理学への転換

#### 1. 心理クリニック対象児に対する正常な学年への復帰の期待

こうした一連の診断・指導経験を経て、ウィトマーは、心理クリニックでの研究と指導によって何を意図するようになったのか。それは、彼がどのような来談児を選択したのかを分析することによって明らかになる。1900年代末頃のウィトマーには、来談児の明確な選択基準があり、それは正常と異常の狭間にいる子どもであった。

初期に心理クリニックは精神薄弱を対象としていなかったが、実際には、ケースレコードから確認できたように重度の痴愚児に対する指導を試みている。しかし、1900年代末には、彼の関心からも、心理クリニックの対象からも、精神薄弱等の明確な障害のある子どもが除外され(Witmer [1896c] 464-465; [1915a] 3; [1915b] 540)、正常と異常の狭間にいる子どもが主たる対象となった。精神薄弱が除外された理由のひとつには、精神薄弱児や他の欠陥児の分野には既に専門家が存在していることがあった(Witmer [1915a] 3)。

それでは、なぜウィトマーは、正常と異常の狭間にいる子どもたちを対象としたのだろうか。その理由として、以下の2点が挙げられる。これらから、ウィトマーは心理クリニックでの個別的指導による正常な学年への復帰に加え、公立学校全般への貢献を意図していたことが分かる。

第一に、心理クリニックの対象児に対する正常への回復可能性への期待である。ウィトマーによれば、彼らの学業不振の原因は、器質的なものではなく、視覚や聴覚などの身体的欠陥、そして環境的要因にあり、それらは適切な身体的・教育的指導により正常な状態に回復できる

のであった(Witmer [1910] 124)。精神薄弱児は、治癒不能な脳の欠陥によるもので、公立学校教育の対象外であり、公立学校へ復帰不可能であると彼が認識していたことも(Witmer [1910] 124; [1917] 228-229)、彼の関心を正常な学年へ回復可能な子どもに向かわせた要因であろう。

第二に、心理クリニックの対象児の適切な理解と分類の困難さが、公立学校問題の原因であると考ええるウィトマーの認識があり、個々の子どもの理解から教育制度への貢献が確認できる。学業不振と精神薄弱の分類の失敗は、治癒不能な精神薄弱児の多くを、学業不振児と呼称する結果となり、都市公立学校が直面している学業不振とは何かという問題を複雑にしていると、ウィトマーは指摘している(Witmer [1909b] 124-125)。彼は、進歩的な都市や州の年次報告書において、遅滞の問題は、重要な位置を占め始めていると指摘する。彼は、遅滞の調査と指導によって、子どもは個別的な対応を得られ、現在在籍する場所より適した場所を得ることができるだけでなく、公立学校に在籍する全ての子どもに有益な効果を持つことができると考えていた(Witmer [1910] 130)。

実際に心理クリニックの開設されたフィラデルフィア市の公立学校では、子どもの適切な分類が大きな課題となっていた。20世紀転換期の同市では、学業・行動・健康に逸脱を示す子どもの対策として、特殊学校の開設・増設に主たる関心があった(Annual Report of the Board of Public Education School District of Philadelphia: AR [1900] 24)。しかし、1900年代末頃の教育長報告においては、「知的特質を厳格に素早く分類することはできない」(AR [1907] 35)、あるいは「どの子どもが特殊学校に出席すべきか、出席するべきでないか明確な規則を発見できていない」(AR [1908] 45)と指摘されていた。

#### 2. 実験心理学から臨床心理学への転換と臨床的対応の重視

##### (1) 教育分野への心理学の応用の手段とし

での心理クリニック：それでは、実験心理学から出発したウィトマーが、子どもの個別的な問題に着目したのは何ゆえであったのか。さらに、教育の分野に関与していった背景には何があったのか。

20世紀転換期のアメリカでは、ウィトマーに限らず、児童研究運動の隆盛に伴い、心理学者は教育問題に着目するようになっていた。ウィトマー自身が、児童研究運動から影響を受けていたかは明らかでないが、彼はホール<sup>12)</sup>を、「正常」児の科学的研究の祖であり、科学的心理学をアメリカに導入し、子どもの精密で公正な検査に注目させた人物として高く評価していた (Witmer [1896b] 392-393; [1911a] 246)。学問として日の浅い心理学を科学として確立させようとした当時の心理学者は (Brown [1992] 36)、その手段として教育分野に関与し、心理学の教育分野への応用を目指した (O' Donnell [1985] 152)。ウィトマーも同様に、教育分野への応用を目指したが、心理学によって教育の分野に貢献するための具体的方法という点では、ウィトマーは主流の心理学者とは異なる立場をとる。この時期、多くの心理学者は、生理学、実験室での実験、そしてなにより量的な方法を強調することで、新しい心理学が真に科学的であることを示そうとした (Brown [1992] 37)。一方、ウィトマーは個別的な対応を強調する臨床心理学を提唱する。

男子生徒に関する相談を通じて心理クリニック開設のきっかけを提供した公立学校教員の指摘と相談は、ウィトマーを、心理学の有用性を社会に示すという課題に直面させた。彼女は、相談に際しウィトマーに対して「心理学者は、検査をとおして綴字の困難の要因を解明し、その改善や治癒のための適切な教育的指導を提言できるべきである」と述べた (Witmer [1907a] 4)。この指摘に対し、ウィトマーは「もし、心理学が自分や他者にとって有益なものであるならば、こうした遅滞児にかかわる教員の努力を援助できるはずである」 (Witmer [1907a] 4) という考えに至った。

ウィトマーは、心理学を先んじて応用する必要がある、かつ心理学の価値が最大になる分野は、教育分野であると主張していた (Witmer [1915b] 549)。その理由には、医療分野と関わりの深かった彼の家庭環境からくる経験が見られる。彼は、教育の分野は広範にわたるうえに、現代においてはその範囲内に教育に間接的に関わる多くの科学が包括されるようになったと指摘した (Witmer [1914] 243)。こうした教育の基礎を支える科学としての心理学の重要性を認識していたウィトマーは、医学の分野において解剖学、生理学、病理学が果たしている役割になぞらえ、これらの諸科学と同様の役割を、教育の分野において果たすのが心理学であると指摘する (Witmer [1914] 243)。医学と同様に、教育もまたその進歩は基礎を支える科学の発展を通して得られるものであり、適切な教育方法を導くためには心理学的基礎が必要であると彼は考えていた (Witmer [1915b] 541)。科学には社会への直接的応用が求められると考えるウィトマーにとって、社会的貢献が可能な医学と比較した際の、心理学の科学としての未発達さは危惧するところであった (Witmer [1911b] 7)。

(2) 公立学校における量的方法の重視とウィトマーの認識：心理学者が教育に関与し始めた時期には、義務教育法の施行によって子どもと公立学校に対する社会の認識の変化があった。19世紀末以降、公立学校では、義務教育法により以前ならば退学していた子どもが公的な責任となった。さらに、子どもは国の財産であるという認識が増すにつれ、公立学校の非効率な状況が指弾されるようになった (Cremin [1962] 127-128)。都市公立学校では、義務教育法に加え、工業の発展による人口の増加と新移民の流入により、施設・設備と指導条件は劣悪となった (Lazerson [1983] 18-19; 宮本 [2005] 20)。こうした状況に対し、落第者や退学者の実態を指摘する報告が発表され始める (Woodward [1896] 1161-64; [1901] 1364-74)。1900年代末には、年齢と学年を対照させた調査がいくつかの都市の教育委員会年次報告書に見

られるようになり (Cornman [1908] 247)、同種の調査が専門家の間でも相次いで実施された (Ayres, 1908; Falkner, 1909)。公立学校における学業不振児や落第児の実態把握の必要性は、ウィトマーの心理クリニックが開設されたフィラデルフィア市においても同様であった。フィラデルフィア市教育委員会では、公立学校に在籍する精神薄弱児や、通常の方法では学習できない学業不振児、留年児の実態調査が実施され、1900年の教育委員会年次報告書に結果が掲載された (AR [1900] 23-24)。

ウィトマーも、量的調査の必要性は認識しており、実際に、都市公立学校における遅滞児の数を決定するために、ニュージャージー州カムデン市教育長の J. E. ブライアン (James E. Bryan) に調査を依頼した (Bryan [1907] 42; Witmer [1910] 128)<sup>13)</sup>。ウィトマーは自身の論文内で同調査に言及し、2年以上の遅滞を「教育的遅滞」とするブライアンの定義に賛同し、ウィトマーによれば、この定義がその後、他都市における遅滞の統計に採用されていた (Witmer [1910] 128)。

しかしその一方でウィトマーは、統計的方法はそれだけでは重大な誤りを生じさせやすいとして、統計的方法は臨床的方法に基づきながら発展させる必要があると指摘した (Witmer [1908] 4; [1909b] 123)。

(3) 臨床心理学提唱の背景としての実験心理学の限界と臨床的方法への期待：それではウィトマーの臨床心理学とはいかなるものであったのか。臨床心理学の萌芽は、1896年12月のアメリカ心理学会 (American Psychological Association: APA) 第5回大会で彼が提唱した実用心理学 (Practical Psychology) に見ることができる (Witmer [1897] 116)。ウィトマーが実用心理学の骨子として挙げたのは、以下の3点であった (Witmer [1897] 116)<sup>14)</sup>。

1. 専門的心理学者、医療従事者、そして教員による治療や教育への心理学的原則の直接的応用

2. 医学や教育の実践において人間が直面する問題を解明しうる、知的状態と知的過程の心理学的研究
3. 医学生や教員に対し、それぞれの専門性において将来の有用性を保証する心理学指導課程の提供

さらにウィトマーは、実験的訓練学校 (experimental training school) として、以下の3つの機関の設立を求めた。すなわち、(a) 専門的な心理学的・教育学的介入を必要とする子どもたちのための独立した学校や家庭、(b) 心理クリニックや心理学的診療所、(c) 市の学校行政の管理下で組織される特殊学校である (Witmer [1897] 116-117)。

こうした発表内容からは後の臨床心理学に連なる考え方が見て取れる (McReynolds [1997] 80)。しかし、当時、この発表に対し、APA会員はあまり反応を示さなかったといわれている (Collins [1931] 5)。なぜウィトマーの発表は当時の心理学者の間で、あまり受け入れられなかったのだろうか。それは、前述したように、当時のアメリカ心理学の主流であった量的方法と合致するものではなかった点が挙げられる。それに加えて、当時の心理学者たちがウィトマーの説に感嘆したとしても、それを実行するために必要な訓練や経験を持っていなかったことも要因の一つと指摘されている (ライスマン [1982] 47)。

実用心理学の提唱を経て、1907年にウィトマーは、自身がこれまで実践してきた心理学的手法に対し、臨床心理学という新たな用語を提起した (Witmer [1907a] 1)。その用語からも、医学の分野を強く意識した彼の考え方がみてとれる。彼は、その方法の特徴を示す意図で“Clinical”の用語を医学から借用した。医学において、従来の哲学的・教訓的な方法から臨床的方法への脱却によって科学的基礎が確立されたと考えるウィトマーは、哲学的思索に由来する心理学や実験室での結果をそのまま教室の子どもに応用する心理学に反対した。医師が患者

の治癒 (cure) に向けて検査し治療 (treatment) するのと同様に、臨床心理学者は子どもの精神的・身体的発達次の段階に向けて検査し、全般的・特殊な学業の遅れ (retardation) がある子どもへの様々な教育的治療 (remedies) を応用することで、その原因を発見する。これによって、科学という名に値するとウィトマーは主張した (Witmer [1907a] 8-9)。

このように、公立学校における学業不振児、非行、大量の落第と留年、怠学の全体像を解明することが主流であり、さらにアメリカ心理学の主流が実験的手法や計量的手法にあった時代において、ウィトマーは個に対応する臨床的手法によって、学業・行動・健康に逸脱を示す子どもの問題にアプローチしていくことになる。それでは、ウィトマーが当時の心理学の常道であった実験心理学から、臨床心理学へと転換した背景には何があったのだろうか。

第一に、ウィトマーが実験心理学の限界を感じていたことが挙げられる。1904年に、彼は、反応時間、動作の割合、感覚量の測定などの精神物理学 (psychophysical) 検査に対して大きな信頼を示しながらも、これらの検査が新しい事実を与えないと彼は考えた。さらに、医師が診断目的で身体的検査から状態を決定できることと同じ意味において、心理学者は知的状態を決定するための満足いく方法を持っていないとして、子どもの知的状態の測定が困難であると彼は指摘した (McReynolds [1997] 122)。医学と同様に臨床的方法により科学としての基礎を確立させようとするウィトマーの意図が看取できる。

第二に、個別の研究の効果に対する期待が挙げられる。ウィトマーは、学校教育と比較し、臨床心理学を説明している。学校教育では、第一に集団指導が重視され、学級内での個人差は考慮されないのに対し、臨床心理学は第一に個々の子どもを対象とし、集団ではなく個人に指導する方法によって区別される (Witmer [1907a] 8; [1909b] 122; [1911a] 256)。彼は、個別性の重視を通して、子どもの欠陥 (defi-

ciency) の要因の特定が可能になると考えていた (Witmer [1907d] 159)。このことは、心理クリニック開設を導いた最初の事例である男子生徒の指導経験においても指摘されている。さらに、彼によれば、個別の研究を実施することで、人間の心に関する知見が獲得され、全ての子どもに適切な教育を与えるという国家としての目的を実行しうる教育制度が開発され、子どもと親への貢献が可能になるというのであり (Witmer [1896c] 464; [1911b] 3)、このことから、個々の子どもの理解から教育制度全般の発展も彼の狙いに含まれていたことが分かる。

#### IV. おわりに

ウィトマーによる心理クリニックは公立学校教員からの直接の相談によって開設され、その後、毎年相談を受け、診断だけでなく指導を導入し、通常学校に在籍する学業・行動・健康に逸脱を示す子どもへの対応を試みた。初期の心理クリニックの研究と指導においては、ウィトマー自身の経験と知識が不足していたこと、そして人材育成に重点を置いていたことから、来談児を少数に制限し、個別性を重視した研究と指導、学生や教員等の訓練が実施された。個別性を重視した背景には、個別的研究によって子どものもつ欠陥の要因の特定と適切な教育制度の開発が可能になるという、彼の経験に由来する信念があった。

正常への回復可能性への期待と公立学校への貢献という背景から、正常と異常の狭間に位置する子どもを主たる対象にし、心理クリニックでは子どもの生育歴、身体的特徴の調査、学校内外での行動の観察を用いて、対応を試みた。その内容は、家庭指導、医師や教員との連携、生活環境の改善、実際の経験の重視、職業指導等が試行的に実施されており、後年の心理クリニックの基盤がここで構築されたといえる。

ウィトマーによる心理クリニックは、1907年に寄付金を得たことによって、彼の念願であった雑誌「心理クリニック誌 (The Psychological Clinic)」の創刊と寄宿制学校の開設が可能にな

った (McReynolds [1997] 124-126; Witmer [1907e] 139)。また心理クリニックは1909年に、ペンシルベニア大学学長に認められ、大学の附属機関へと発展し、職員体制が整えられ (Witmer [1909a] 102)、その後の基盤が構築された。開設から10年ほどの実践によって、一定の成果を得たといえる。

しかし、当時の公立学校やフィラデルフィア教育委員会においては、落第や留年児の実態把握や特殊学校の開設・増設に重点が置かれており、個々の子どもたちの適切な分類の必要性が指摘されるのは1900年代末になってからであった。また、心理学における統計的・数量的評価への過度な依存があった革新主義の時代にあつて、彼の考えや心理クリニックの実践は、教育委員会の間でも、心理学者の間でも、高い評価を得たものではなかった。

## 註

- 1) 心理クリニックは1961年に閉鎖された。
- 2) 1910年には児童精神科医であり非行研究の開拓者であったW. ヒーリー (William Healy 1869-1963) によって児童相談クリニックが開設された (Richards [1988] 202)。また1912年と1914年には、臨床心理学者のJ. E. W. ウォーリン (John Edward Wallace Wallin 1876-1969) によってペンシルベニア州ピッツバーグ市とミズーリ州セントルイス市に心理教育クリニックが開設された (O'Donnell [1979] 12)。
- 3) その理由として、Thomas (2009) は、ウィトマーが優れた理論を提唱しながらそれを体系化できなかったこと、そして彼の理念や活動が当時の主流の要素と合致しなかったことを挙げている (Thomas [2009] 12)。
- 4) たとえば、単語の最初と最後が省略されたり、現在形と過去形、複数形と単数形、副詞と形容詞の区別ができなかった (Witmer [1907a] 3)。
- 5) キャッテルによる人体計測的精神検査 (anthropometric mental testing) と個人差の概念は、ウィトマーに強い影響を与えた (Baker [1988] 119; Fagan [1992] 237; Sokal [1987] 34)。
- 6) マサチューセッツ州では、1919年の学校クリニック法にて、学業が3年以上遅れた子どもに対する知能検査と統計調査の実施、そしてそうした子どもが10人以上いる全ての市とタウンに対する特殊学級の設置が規定された (Fernald [1923] 162)。
- 7) その他にウィトマーは、母国語として言語を習得するには14歳では遅すぎ、より早期の訓練が必要であったこと、身体的欠陥はそれ自体が脳に影響を及ぼすわけではないが、知的発達を阻害する恐れがあることも指摘した (Witmer [1907c] 64)。
- 8) 1896年から1908年までの1年あたりの来談児数が約35件であったのに対し、1909年から1931年には約412件であった (Fernberger [1931] 21)。
- 9) この時期の心理学者による検査は特定の機能のみを測定する単一のテストであり、標準化されておらず、信頼性や妥当性を評価する方法もなかった。したがって初期の検査は限定的な適用であり、当時の教育者の評価は低かった (Winzer [1993] 266-267)。
- 10) 1907年の臨床心理学提唱以後も、心理クリニックに精神薄弱児は来談していたが、基本的には精神薄弱と診断された場合、精神薄弱施設への入所が推奨された。こうした対応は、ウィトマーが最も関心のある事例に、より時間を費やすためであった (Witmer [1915a] 7)。
- 11) これらの検査項目は、1900年6月に開設されたクリニックの一種であるシカゴ児童研究実験室 (child study laboratory) においても同様に実施されていた (Loesch [1902] 715)。
- 12) ホールは、アメリカの心理学、とりわけ児童・青年心理学の礎石を築いたパイオニアであり、観察・調査・測定・実験など科学の枠組みをアメリカの教育界に持ち込み、研究結果から子どもの心的内容を客観的に把握し、学校教育の改革を目指していた (松岡 [1982] 354; 菅野 [1988] 53)。
- 13) ウィトマーがカムデン市を選択した理由のひとつは、フィラデルフィア市のような大規模な都市においては、遅滞児の実態把握という課題は、あまりに巨大で困難であるため、最初に小規模な都市においてそれを実施すべきと考えたためであった (Witmer [1910] 128)。ブライアンとウィトマーの間になどのような関係があったかは不明である。
- 14) 実用心理学についてウィトマーは後年、「科学と呼ばれるものの価値の最終的な評価は、その

応用性である」(Woodward [1906] 833) という1906年のアメリカ科学振興協会 (American Association for the Advancement of Science) でのC. M. ウッドワード (Calvin Milton Woodward 1837-1915) 議長の言葉を引用し、自分も同種の理念によって実用心理学を提唱したと回顧している (Witmer [1909b] 121)。

## 文 献

### Abbreviations

PC: The Psychological Clinic

Annual Report of the Board of Public Education School District of Philadelphia. 1900; 1905; 1907; 1908.

Ayres, L. P. (1908) Some Factors Affecting Grade Distribution. *PC*, 2(5), 121-133.

Baker, D. B. (1988) The Psychology of Lightner Witmer. *Professional School Psychology*, 3(2), 109-121.

Brown, J. (1992) *The Definition of a Profession -the Authority of Metaphor in the History of Intelligence Testing, 1890-1930*. Princeton University Press, Princeton, NJ.

Bryan, J. E. (1907) A Method for Determining the Extent and Cause of Retardation in A City School System. *PC*, 1(2), 41-52.

Case Records. 0021; 0037; 0039; 0040; 0041; 0043; 0056; 0063; 0064; 0070; 0072; 0073; 0074; 0087.

Catalogue of the University of Pennsylvania (CUP), 1893-1894; 1894-1895; 1895-1896.

Collins, J. (1931) Lightner Witmer: A Biographical Sketch. In R. A. Brotemarkle (Ed.), *Clinical Psychology Studies in Honor of Lightner Witmer to Commemorate the Thirty-fifth Anniversary of the Founding of the First Psychological Clinic*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 3-9.

Cornman, O. P. (1908) The Retardation of the Pupils of Five City School Systems. *PC*, 1(9), 245-257.

Cremin, L. A. (1962) *The Transformation of the School Progressivism in American Education, 1876-1957*. Alfred A. Knopf, New York.

Doll, E. E. (1967) Trends and Problems in the Education of the Mentally Retarded: 1800-1940. *American Journal of Mental Deficiency*, 72(2), 175-183.

Fagan, T. K. (1992) Compulsory Schooling, Child Study, Clinical Psychology, and Special Education.

*American Psychologist*, 47(2), 236-243.

Fagan, T. K. & Wise, P. S. (1994) *School Psychology Past, Present, and Future*. Lohgman, New York.

Falkner, R. P. (1909) Some Uses of Statistics in the Supervision of Schools. *PC*, 2(8), 227-233.

Fernald, W. E. (1923) The Salvage of the Backward Child. *Boston Medical and Surgical Journal*, 189(5), 161-165.

Fernberger, S. W. (1931) History of the Psychological Clinic. In R. A. Brotemarkle (Ed.), *Clinical Psychology Studies in Honor of Lightner Witmer to Commemorate the Thirty-fifth Anniversary of the Founding of the First Psychological Clinic*. University of Pennsylvania Press, Philadelphia, 10-36.

Gardner, J. M. (1968) Lightner Witmer--a Neglected Pioneer. *American Journal of Mental Deficiency*, 72(5), 719-720.

Hoffman, E. (1975) The American Public School and the Deviant Child: The Origins of Their Involvement. *Journal of Special Education*, 9(4), 415-423.

Hollingsworth, L. S. (1933) Psychological Service for Public Schools. *Teachers College Record*, 34, 368-379.

Jones, J. H., Jr. (2002) *The Lost Legacy of School Psychology: Toward A Reevaluation of Lightner Witmer (1867-1956)*. Doctor of Philosophy in the Department of Educational Psychology Indiana University.

Lazerson, M. (1983) The Origins of Special Education. In J. G. Chambers and W. T. Hartman (Eds.), *Special Education Policies, Their History, Implementation and Finance*. Temple University Press, Philadelphia, 15-47.

Levine, M. & Levine, A. (1970) *A Social History of Helping Services, Clinic, Court, School and Community*. Appleton-Century-Crofts, New York.

Levine, M. & Wishner, J. (1977) The Case Record of the Psychological Clinic at the University of Pennsylvania. *Journal of the History of the Behavioral Sciences*, 8(1), 59-66.

Loesch, A. (1902) The Child Study Department of the Chicago Public Schools. *Journal of Proceedings and Addresses of the National Education Association*, 41, 710-716.

Louttit, C. M. (1939) The Nature of Clinical Psychology. *Psychological Bulletin*, 36, 361-389.

- 松岡信義 (1982) アメリカの児童研究運動 (Child Study Movement) —その思想と性格—. 教育学研究, 49(4), 353-362.
- 宮本健市郎 (2005) アメリカ進歩主義教授理論の形成過程. 東信堂.
- McReynolds, P. (1987) Lightner Witmer Little-Known Founder of Clinical Psychology. *American Psychologist*, 42(9), 849-858.
- McReynolds, P. (1997) *Lightner Witmer His Life and Times*. American Psychological Association, Washington, D. C.
- 中村満紀男・岡典子 (2009) 障害児教育における目的・本質論の歴史的変遷とその理論的・実践的意義—序説. 障害科学研究, 33, 113-126.
- O' Donnell, J. M. (1979) The Clinical Psychology of Lightner Witmer: A Case Study of Institutional Innovation and Intellectual. *Journal of History of the Behavioral Sciences*, 15, 3-17.
- O' Donnell, J. M. (1985) *The Origins of Behaviorism*. New York University Press, New York and London.
- Reisman, J. M. (1976) *A History of Clinical Psychology*. Irvington Publishers, New York. 茨木俊夫訳 (1982) 臨床心理学の歴史. 誠信書房.
- Richards, B. (1988) Lightner Witmer and the Project of Psychotechnology. *History of the Human Sciences*, 1(2), 201-219.
- Sarason S. B. (2001) *American Psychology & Schools: A Critique*. Teachers College Press, New York and London.
- 下村哲夫 (1975) 義務教育制度の低迷. 世界教育史研究会 (編), アメリカ教育史 I. 講談社, 210-236.
- Smith, T. L. (1914) The Development of Psychological Clinics in the United States. *The Pedagogical Seminary*, 21, 143-153.
- 菅野文彦 (1988) G. S. ホールの教育思想の成立—自然科学の進展と反復説—. 西洋教育史研究, 17, 53-73.
- Thomas, H. (2009) Discovering Lightner Witmer: A Forgotten Hero of Psychology. *Journal of Scientific Psychology*, 3-13.
- Trent, J. W. Jr. (1995) *Inventing the Feeble Mind: A History of Mental Retardation in the United States*. University of California Press, Berkeley. 清水貞夫・茂木俊彦・中村満紀男 (1997) 「精神薄弱」の誕生と変貌：アメリカにおける精神遅滞の歴史 (上). 学苑社.
- Winzer, M. A. (1993) *The History of Special Education*. Gallaudet University Press, Washington, D. C.
- Witmer, L. (1896a) The Teaching of Psychology to Teachers. *The Citizen*, 2, 153-162.
- Witmer, L. (1896b) The Common Interests of Child Psychology and Pediatrics. *Pediatrics*, 2, 390-395.
- Witmer, L. (1896c) Practical Work in Psychology. *Pediatrics*, 2, 462-471.
- Witmer, L. (1897) The Organization of Practical Work in Psychology [Abstract]. *Psychological Review*, 4, 116-117.
- Witmer, L. (1907a) Clinical Psychology. *PC*, 1(1), 1-9.
- Witmer, L. (1907b) University Courses in Psychology. *PC*, 1(1), 25-35.
- Witmer, L. (1907c) A Case of Chronic Bad Spelling - Amnesia Visualis, Due to Arrest of Post-natal Development. *PC*, 1(2), 53-65.
- Witmer, L. (1907d) Retardation through Neglect in Children of Rich. *PC*, 1(6), 157-174.
- Witmer, L. (1907e) The Hospital School. *PC*, 1(5), 138-146.
- Witmer, L. (1908) Retrospect and Prospect: An Editorial. *PC*, 2(1), 1-4.
- Witmer, L. (1909a) The Psychological Clinic: The University's Work for Defective and Backward Children. *Old Penn Weekly Review*, 8, 98-105.
- Witmer, L. (1909b) The Study and Treatment of Retardation: A Field of Applied Psychology. *Psychological Bulletin*, 6, 121-126.
- Witmer, L. (1910) What is Meant by Retardation?. *PC*, 4(3), 121-131.
- Witmer, L. (1911a) Courses in Psychology at the Summer School of the University of Pennsylvania. *PC*, 4(9), 245-273.
- Witmer, L. (1911b) Motives and Aims. In L. Witmer (Ed.), *The Special Class for Backward Children*. The Psychological Clinic Press, Philadelphia, 1-10.
- Witmer, L. (1914) The Scope of Education as a University Department. *PC*, 7(9), 237-249.
- Witmer, L. (1915a) Clinical Records. *PC*, 9(1), 1-17.
- Witmer, L. (1915b) *The Exceptional Child at Home and in School*. University of Pennsylvania: Lectures by Member of the Faculty. The University, 534-555.

20世紀転換期アメリカ合衆国公立学校における学業・行動・健康問題に対する心理学者の関与

Witmer, L. (1917) Two Feeble-minded Maidens -a Clinical Lecture. *PC*, 10(8), 224-234.

Woodward, C. N. (1896) At What Age Do Pupils Withdraw from the Public Schools. *Report of Commissioner of Education for the Year 1894-1895*, II, 1161-1170.

Woodward, C. N. (1901) When and Why Pupils Leave School - How to Promote Attendance in the Higher

Grades. *Report of Commissioner of Education for the Year 1899-1900*, II, 1364-1374.

Woodward, C. N. (1906) Address of the President of the American Association for the Advancement of Science The Science of Education. *Science*, 24, 833-845.

—— 2011.9.1 受稿、2011.12.29 受理 ——

**Historical study on the role of psychologists in the problem of deviant children in the turn of the 20th century America: Focusing on Lightner Witmer's Psychological Clinic**

**Ryo YOSHII**

This study examines the educational experiment in the Psychological Clinic which Lightner Witmer (1867-1956) conducted in the United States in the turn of the twentieth century. Witmer established his own private psychological clinic in the University of Pennsylvania with the consultation of teachers at local public schools as a starting point for the application of psychological principles to educational problems. At his clinic, he provided individual and continual treatment to children whose conditions were located between normal and abnormal. In this background, there was his belief that the detection of the factors in defect and the reform of public schools became possible by the emphasis on individuality. The children received the treatment designed based on individual needs as well as physical and environmental care by school teachers, physicians, and parents. Although the early practices led the foundation of his clinical application in later time, his principles and practices did not receive high commendation first because of the emphasis on quantitative studies and statistical methods at that time.

**Key words:** Lightner Witmer, Psychological Clinic, deviant children, the United States

---

Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba  
Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science